■ 巻頭言

活発な研究活動を期待する

神奈川大学大学院経営学研究科委員長
照　屋　行　雄
Yukio Teruya

今年度も多くの貴重な研究論文が寄せられ、『研究年報』第10号が発行されましたことを心よりうれしく思います。論文を提出された執筆者各位の真摯な努力を多とするとともに、研究指導に当たられた指導教授他の先生方に感謝申し上げます。

さて、院生諸君にあっては、日常的には指導教授の適切で熱心な指導のもと、各自の研究目的と研究計画に基づいて、主体的・積極的に研究活動に努めているものと思います。大学院における研究成果の取りまとめは、経営学研究科の前期課程にあっては修士論文として、また、後期課程にあっては博士論文の作成の段階で結実することになります。大学院における前期2年以上あるいは後期3年以上に及ぶ研究生活は、基本的には学位論文の完成に向けて全体が設計され、効率的に運営されるということができます。

このような学位論文の完成に向けての研究は、本質的には院生一人ひとりの計画的・規則的な研究努力の積み重ねによって成立するものですが、他方で、研究の効率的な遂行と良質な成果の達成を支援する研究環境の組織的な整備が重要となります。ここで研究環境という場合、第1には、研究施設・設備、機器・備品、図書・学術誌などの物的・財務的環境をいい、第2には、カリキュラム、教育スタッフ、指導システム、生活支援サービスなどの人的・教育的環境を意味します。いずれも公式的な研究環境といえます。

ところで、経営学研究科においては上の2つの研究環境の他に、院生個々人の日常的な研究活動を支え、研究成果の質を高める上で有効な働きが期待される第3の研究環境の形成が求められているように思います。それは、経営学研究科内における院生諸君の研究会活動や研究発表活動の積極的・組織的な展開です。大学院の公式カレンダーには、年に2回ほど院生の論文発表会(博士論文公聴会を含む)が組み込まれていますが、それとは別に、院生諸君の自主的な運営による研究発表活動が期待されています。

研究テーマが多様で、研究の進捗もそれぞれに違う多数の院生が、経営学研究科内で研究発表活動を組織することの難しさはあるが、是非構成メンバーの理解と協力を集めて活発に推進して欲しいと願っています。具体的には、例えば“国際経営ワークショップ”を2ヶ月に1回程度の頻度で開催し、各回2人の発表者を予定するなどの研究発表会が考えられます。その成果は研究論文または研究ノートとしてまとめ、本誌

に掲載することができれば生産的です。そのための運営委員会を組織して、そこで計画・運営に当たることにすれば結構だと思います。教員スタッフも積極的に支援したいと考えています。

最後に、本誌の編集に尽力頂いた高橋浩司委員長他の編集委員各位、並びに編集全般の指導に当たられた海老澤栄一先生(研究科運営委員)に対して謝意を表したいと思います。また、大学院担当の西原聖織氏の協力に感謝申し上げます。経営学研究科に所属する院生諸君の研究の一層の発展を祈念いたします。